

国際交流ネクストステージ「となりの外国人」

一般財団法人東北多文化アカデミー
押谷 祐子 代表理事

平成24年2月25日（土）17:00～18:30

講演者の背景

私どもの財団は大学や高校のような一条校ではありませんが、国内外の高等教育機関と連携したり行政の委託をいただいたりして活動することもあり、学都仙台コンソーシアムのメンバーになっております。私はもともと日本語教師で、大学院の専攻は多文化教育とバイリンガリズムでした。大学の学部で日本人学生・留学生が共修する「多文化クラス」の実践に携わってから10年以上になります。この実践は、社会人になってからグローバル企業の「ダイバーシティ・トレーニング」にもつながるものだと確信しています。



講義形式について

この復興大学は大学ということで講義形式が多かったと思いますが、教室に先生が「こんにちは」と入ってきた時点と、「さようなら」と帰っていった時点で何か“変化”しているというのが教育だとすると、「知らなかったことが分かった」という知識の量以外に、体育の授業のように「できなかったことができるように

なった」というスキル・ビルディングの“Change”もあります。また1学期の講義が終わってから現れる変化、5年後10年後に、「何かあのとき先生が言っていたのはこのことだったのかな」というような、隠れていた変化もあるように思います。

教室に入るときには考えたことがなかったけれど、出たときには考えるようになっていた・・・そういうアティチュードや気づきが、クラスの参加者が何か一緒に体験をすることによって産み出されていく・・・「体験」と「考えること」がセットになっているようなそういうクラスを「体験型クラス」といいます。私どもがやっているのは、そういう体験型の講義です。ここの皆さんに来たときと帰ったときと変化があるか、私は楽しみにしております。

「先生、あなたが外国人です!」

皆さんちょっと周りを見回して、このクラスの自分の前後四方、前後ろ右左2人ぐらいの間に外国人がいますか。（「はい」の声あり）自分の周りですよ。すごく遠くにはいるかなというのは別として、「隣は外国人」。「隣に外国人がいる」と思う方、手を挙げてください。（数人の手が挙がる）ありがとうございます。

じゃあ、「外国人」の方、手を挙げてください。（数人の手が挙がる）はい、どうもありがとうございます。

私どもの多文化クラスでは、日本を含めた多国籍の学生をミックスしていろいろな話し合いをします。同じ質問をクラスでしました。「外

国人ってどんな人?」「いますか? 外国人」・・・
その時中国籍の学生が勢いよく立って、
「先生、あなたは外国人です!」
「えっ?! 私(自分を指差して)外国人?」
「そうです。私は外国人じゃありません、中国人です。先生が外国人です!」

・・・日本ですよ、東北大学の授業です。どうでしょう。(「そのとおり」の声あり)

それではあらためてここで、「外国人じゃない」人手を挙げていただけますか。ありがとうございます。今、手を挙げた方は、「外国人です」と手を挙げた方にとって・・・(「外国人」の声あり)・・・ですね。

誰が誰をどういう状況で「外国人」と呼ぶか

このクラスを見渡すと、「見える(visible)外国人」と「見えない(invisible)外国人」とあるかもしれません。例えば中国・韓国から来た方は、アフリカから来た方に比べて「見えない外国人」になる可能性は高い。

それから、もしこの場(ホストカントリー)がアメリカだったとしたら、この場にアメリカ人はいないようですから、日本人のあなたもお隣の外国人も、お互いに外国人同士です。

アメリカの大学院で勉強していたとき、英語ができないアジア系新移民の「マイノリティ・アメリカ人」として扱われることがよくありました。その時「私は外国人です!」と叫びたい気持ちになったことを思い出します。私どもの財団に今いる職員のうち、1人は日本に帰化した元外国人です。それから日本永住権を持っている日本国籍でない者、外国籍で日本語と母国語のほぼ完璧なバイリンガルで在留資格を持って働いている者などもあります。一見外国人だけれど、赤いパスポートをちゃんともっていて「外国人じゃありません、差別しないで下さい。」といわれる可能性もあるんです。よく見ると、コミュニティの中には日本人の配偶者、在日韓国人等の特別永住者も住んで働いて暮らしています。留学生のみなさんも日本に就

職して何年か経つと永住者になったりします。同化の気持ちが強くなると「外国人っていわれたくない」と思うかもしれません。

グループワーク

それではグループになって「今イメージする外国人」について話し合ってください。今回せっかく「外国人です」と手を挙げた方がいるので、各グループに外国人の方々に入ってもらえるようにグループ分けをします。日本語が不自由な方とそうじゃない方がいると思いますが、不自由な方と話すときにどのように話すかということも経験しながら、英語じゃなくて日本語で話してみたいと思います。この国のこの場所、仙台に来て、外国人という状況をどう感じているのか。



ちょっと軽く自己紹介していただいてもいいです。でも「国際交流」ではないんです。「あなたの国ではどんなものを食べますか」とか、「あなたの国の踊りを踊ってください」とか、そういうことではなく、です。

「先生、あなたは外国人です」と、クラスで言われて私は「おおっ」と思いましたが、そのとき、何で私は「おおっ」と思うのか。皆さんだったらどうですか。「外国人はあなたでしょう。ここは私の国だし・・・」そんな感じでしょうか。そういうことをお話ししてください。お願いします。

グループワークの振り返り

はい、それでは、大体10分になったので、お話

を打ち切っていただきます。

どうも見ていますと、1人の外国人の方にみんなで質問をするという、パターンでしたね。「皆さん外国人について話し合ってください」と指示を出したら何が起こったかという、1人の外国の方にみんなで質問を浴びせた・・・何か聞かないと失礼かなと思ったそういう優しさもあったかもしれませんが、例えばこのグループ（前列のグループを指す）に彼女（外国人）がいなかったら、皆さんはどういう話をしたと思いますか。だれか一人を捕まえてみんなで聞いたのでしょうか。（「しないな」という声あり）じゃあ、どうして彼女がいることによって質問が集中したのでしょうか。おもしろいですね。

○参加者：それは、日本人のグループというのは、日本人自身は多民族国家じゃないのでそこに1人が入ってきたら、その人に対して、いろんな目で今までは見ていたわけだから、わからない文化なりわからないことを聞きたいというのが、今の日本人の心理だと思う。

○押谷：私は、「国際交流はしないでください、あるテーマについて話し合ってください」と申し上げました。でも、とてもいい例です。「グループの中に「外国人だ」と思う誰かが入ってくると、そういうふうになります。そこから先が「ネクスト・ステージ」です。周りにいる相手をどう意識するかで話題も話し方も変わりますね。「多民族国家ではない」とはいえ、グローバル化の高度人材獲得競争や、それがなくては生活がなりたない労働にかかわる「外国人」は確実に存在しています。見えない外国人、働く外国人が結構いるんです。

ペアワーク

それではせっかくグループ別に移動していただきましたのでそのまま座ってお手元の資料を見て下さい。日本という国土にいる日本在住者の年齢別人口です。

60年前、50年前、40年前、25年前、15年前、5年前。そして、5年後、15年後、40年後です。（「いないわな」の声あり）そうです。

私も含めて、自分はどういかなと思う方もいらっしゃるかもしれません。自分がどこに当たるのかというのを年代ごとに追っていくのも面白いかもしれません。これを見てちょっと思ったことを、「私はここなんですよ」とか、「どう思いますか」とか隣の方とお話いただけますか。

ペアワークの振り返り

一番最初の70年前と最後の40年後を見てください。人口は明らかに減少していますが、どこか似ていますね。年齢別人口の左右が逆です。

○参加者：今の政治を前提に話されていますが、江戸時代の人口は3,000万人以下です。私は20歳前後で米沢で過ごしたんですが、炭団3つで、丹前を着て、マイナス20度で、股火鉢で生活していたんですね。東京からきました。今年寒くて、ことし東京で私が使っているガス代と電気代で約2万円から3万円。それを前提にして生活しています。3,000万人以下になっても日本人は生活できるんじゃないかと思っています。以上です。

○押谷：おもしろいご意見ですね。ライフスタイルを昔に戻す。しかし炭団で丹前というのは今の若者にとって「それって日本の話なの？」ですね。これから徐々にライフスタイルを、消費パターンを、原発の問題もありますが、変えていく。それも、一つの大変に示唆に富むポイントだなあとは思っています。（「それではいられない」の声あり）その方向性を誰が決めるのか、みなさん考えたくありませんか。

○参加者：すみません。私は今30代で、3歳の子供を育てている専業主婦なんですけれども、先ほどライフスタイルを変えるというご提案の中で、私は勉強不足で、炭団とか丹前という言葉がわからなかったんです。それは威張って言うことじゃないんですけれども、でも、やっぱりその交流というか、高齢者の方がふえていく中で、いかに私の子供の世代が、将来、私も含めて高齢者を支えていく中で、やっぱりその世代間の交流というのは、今、核家族とかが進んでいる中ですごく大切

だと思うんです。だから、自分にできることは何かかなと思ったときに、何かそういう先人の生活スタイルを受け継ぐとか、それも一つ生活を見直す方法じゃないかと思います。（「受け継がないほうがいい」の声あり）

○押谷：ご意見ありがとうございます。皆さんまだ記憶に新しいと思いますが、震災の後に、一時的にライフスタイルを変えざるを得ない時期がありましたよね。ガスがない、電気も節電、コンビニに行っても買うものがなかった。

○参加者：人口が減ると労働力が不足するというのですが、人口が減れば、必要な労働力も減るといふか、仕事の量も減るからあまり困らないんじゃないかなというのもちよっと思ったんですが。

○押谷：そうですね。ただ、人口が減るだけではなく、年齢構成が変わってきます。人口が減ること自体は、経済活動がだんだん地味になっていってそれなりに暮らすというのはあるかもしれませんが、高齢者の比率が多くなり、それを支える労働人口、若年層の比率がこのように変わってしまうということは、やはりちょっと想像し難い未来かもしれません。

気づかないところに

それではどうして外国人かというところです。こ未来のことはこれからの試算ですので確実ではありませんが、ある指標をもとにこのように予測することが可能です。これをどうするか。労働人口が足りない。じゃあ、女性や高齢者、障害のある方にも活躍していただくということが言われていますが、この資料にはそれらの方々も含まれています。そうすると、もう一つ、つい先日の国会の中でも、昨年的人口統計が出たということもありまして、外国の方、という言説がありました。

実はもう私たちの社会構造の中に「サイドドア」ともいえる入り方で合法的に外国人が多数組み込まれています。日系人や技能実習生、留学生のアルバイトなどです。職種にしたら製造業、建設、農業・漁業、そしてクリーニングやホテルなどのサービス産業にも、10万人近くの方々が働

いています。

看護、介護はどうでしょう。2008年にインドネシアやフィリピンとEPA（経済連携協定）が始まり、今は在留資格の制限がありますが、これから枠が拡大されるかもしれません。皆さんの「となりの外国人」。今日の初めのように、ちょっと隣を見たら「となりの外国人」。

それからブラジルなどから来た「日系人」はあまり仙台周辺では見かけませんが、中部地方には一つの団地がほとんど日系人等の外国人という場所もあります。1980年代の終わりにちょうど日系人の在留資格の制限が緩和されたことを、日本に来てどんな仕事でもしていい、つまり単純労働していいというふうになったとき、賛成とか反対とか考えたことがありますか。リーマンショック後に税金で帰国支援をしています。人の移動の影響は長いスパンで丁寧に考える必要があります。

留学生の定住志向と社会的階層

留学生の方の就職と定住志向も高まっています。先ほど外国人の方とお話しして下さったときに、「将来あなたは国に帰りたいですか？ チャンスがあったら日本で就職したいですか？」とか聞いた方がいたら、すごくいい、ナイス・クエスチョンだと思います。

私は大学で留学生の就職支援もしています。東北大などの留学生はホワイトカラー高度人材として大企業にも迎えられると思いますが、一方の極に製造業や農業・漁業の方々、中間ぐらいに看護・介護が入るかもしれません。ある一定の職業に、ある一定の人種の方が就く、そういう未来を想像できますか。それをやる人がいない社会というのを考えられますか

人種差別？

この写真を見て下さい。アジア系の外見を持つこの方は日本のパスポートを私たちに見せています。「私は日本人です」と言われたら、「あなたは日本人じゃないよ」と言いますか。



ニューズウィーク日本版 2006年9月13日号

「あなたは人種差別をするんですか。私は日本人です。差別です。」と気分を害されるかもしれませんが、国際交流を楽しくやっていたと思ったら、「訴えます。あなたは差別主義者です」。

これと同じようなことはどこかで聞いたような気がしませんか。昔、女性に対して、「髪がきれいだね。足が細いね。」とか言って和んでいた（と思っていた）時代があった。ところが、今は状況によってはセクハラと感じる女性もいる。

未来のシナリオに想像力を

この記事は、日本の魅力、いわゆる高度人材と言われる方たちが来たい国のランキングです。日本は44番。韓国やフィリピンやインド、インドネシア、中国でも13位。1位はどこだと思いますか。（「スイス」の声あり）はい、そうです。1位はスイスです。

国民のほとんどが自分は中間層だと思えるような、世界でも類を見ないという状態に日本があった時代がありますが、今は大いに揺らいでいます。そこに外国人をかぶせて、実際にはデータとして

は否定されていますが、職の奪い合いになると感じる方もいるかもしれません。じゃあ日本人だけで回そうか、この何十年後、どんな社会に、どんな国にしたいか、いい知恵があったら、みんなで話し合っ、どうしたらいいかということを考えるきっかけになったらと思います。知らないうちに政財界主導で出入国管理や在留資格などの決定がなされ、「私は知らなかった。聞こえなかった」ということがないように。

例えば日系人の方々は定住者ですのでご家族で在留できます。でもその子どもたちには就学「義務」がなく、何年もたってから心痛むような結果になることもあります。

ちょっと話が散漫になりましたが、水（自然）と安全（信頼）が空気のようにいつも側にある、大好きな日本を守るため、必要なら、どんな形でか、どんな人たちかと、幸せにシェアできる生き方があるのかなあと、日々考えています。

将来の指針は？

○参加者：すみません。どうしても話の中身が、特定なビジネスモデルを採択するか、何かそんな感じがして、国内でいっても職を持たない人がいっぱいいるわけですよ、人種を別にして。そういった中、この外国や国際というものの枠組みがどうかかわっていないんですよ。だから、共存しているけれども、共存しているところの問題とは何かという話だったらわかるんだけど、今現在もう1時間たったけれども、その辺が見えてこないんです。特定の、例えば、「何年後に人がいませんよね」と言われても、じゃあ外国から来ている人たちは、その何年後にやはりいなくなるかもしれない。相対的に減っていったらば、これはどうなるのと。今までの数字から行くところだけれどもというのは、モデルにしかならないですよ。ですから、それをどうするのかじゃなくて、どうするのかを知りたいんだけど、何かその指針みたいなものを何か示してもらわないと。中間でもいいですから。

○押谷：分かりました。私がいま提示しているの

は一つのシナリオ、一つのモデルですので、これが正しいとか、こうした方がいいとか、単純労働者にもっとビザを出しやすくするとかしないとか、そういう特定の立場に今のところ立っていません。ただ、こういうモデル、こういうシナリオが考えられるということを今日は皆さんに提示し、外国の方と国際交流を超えて接していく準備を始めていくに当たり、自分の心理的な態度（「問題意識」の声あり）もしくは、問題意識とどなたがおっしゃいましたけれども、常にそういうことにアンテナを張って考えてはいかがでしょうかというご提案であって、どうしたらいいかという決まった答えは私にもありません。私だけではなく、出入国管理に関する日本の関係省庁の態度もあいまいです。諸外国の例も参考にしかたならない。

ただ、人口が減っていくことと、震災後の復興に必要な職のミスマッチが人手不足と就職難としてセットになっているのは確かなようです。それと、外国人を結びつけ、ある種「ストーリー」として提示しているわけです。

個人的には、現行の法令の枠組みの中で、本当にやる気のある方々に「語学の習得や学業」と「就労」の組み合わせをフレキシブルに提供し、例えば看護・介護などの医療・サービス部門で営利目的のブローカーを排しつつ（国がブローカーになるという実態もあります！）人材を丁寧に育成し、国籍はともかく地域の「よき市民」になっていただくことは、私の考える方策の一つです。日本にいらっしゃる方、日本で受け入れる方、どちらも我慢し過ぎない win-win の関係が見えてきたら、徐々に次の段階に移るのが理想ではないでしょうか。

まとめに変えて

人権を無視した労働力としか見ないことは論外ですが、もてなすとか、外国の方に気を遣うとか、かわいそうだから助けてあげようとか、そういうスタンスも長続きしないかもしれません。

多分自分の身近な日本人同士の中でも起こる姻戚関係や義理の関係を、一つ抽象度を上げて、実

家の文化を押しつけるのでもなく相手に振り回されるのでもない、ゆるい「身内」として一つ上から見るスコープを持てば、そんなに難しいということではないのかなという気もいたします。

当初の「あなたは外国人ですか」という問いも、どこに中心を置くかによって変わります。あなたの立ち位置はどこか。私は今ここに立っていたけれども、結婚してアメリカ人になっちゃったらこっちに立ったということもあるかもしれません。私は何々人だったけれども、帰化して世界の中心がここになっちゃったということもあるかもしれません。

このように物の見方を変えていって、そして、こう抽象度をちょっと上げて共通する部分を味わい、違いを刺激にするということが、ヘイト・クライムといわれるような宗教や文化が違うということで、撃ち合ったり殺し合ったりすることを防ぐと思います。

不安定な現在と先が見えない未来の中で日本の若い人にも閉塞感がある。年配者の自殺者も多い。こういう状況の一つの解決策として、「いろいろな国で生まれ育った、いろいろな背景を持つ人と、同じこたつに入ってみっか」みたいなそういうことも一つの選択肢じゃないのかなと。役割を与えられた時の日本人の多文化調整能力は、個人主義の文化の人に比べて非常に高いと思います。

きょうは、具体的な宮城県や東北地方の外国の方たちのインタビューなども用意したんですが、一回でできることではないので、復興大学でシリーズになったときに、だんだんズームしていくように、またお話しする機会もあればと思っています。

それでは、私の話は、きょうはこれで終わらせていただきます。皆さん、お足元の悪い中、お集まりくださりましてありがとうございます。協力して下さった外国人の方たちにありがとうございます。（拍手）